

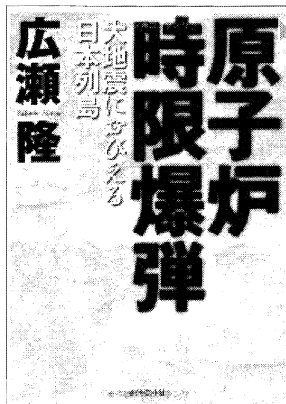
脱原発の書籍数点のご紹介

— 脱安保との関連の意見も注目 —

吉川 勇一

◆ 3・11以後、脱原発の書籍は多数出版され、とても全部は眼が通せない。ごく一部だけに
なるが、何点かをご紹介します。

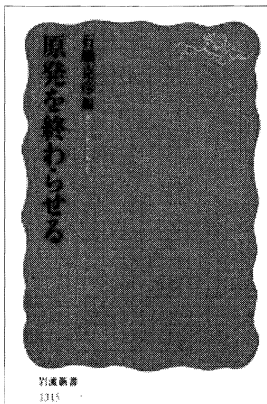
まず広瀬隆の2点。『原発破局を阻止せよ!』(朝日新聞出版、1200円+税)は最新のもので、「週刊朝日」で現在も連載中の記事の編集だ。その冒頭に編集者の堀井正明が書いているが、元来は、3・11よりも半年以上も前に、今読んで驚くほど、今回の大地震、津波、そして福島原発事故を完璧に予想し、



警告し、戦慄した書籍を広瀬は出版している。それがもう一冊の『原子炉時限爆弾』(ダイアモンド社、1500円+税)だった。

◆ まず新著のほうを読みたい。非常にわかりやすく、興味深い具体例や写真、図例とともに書かれてある。リニア中央新幹線が無用の浪費と指摘されたり、中国と日本の事故に共通の隠蔽体質があるという論述など、新鮮な内容であり、かつ納得できる。そして、さらに地震と原発の関連について広く読むのなら、後者をお勧めする。これもわかり易い本だ。

◆ この中で、広瀬は、地震学者の石橋克彦が「原発震災」と呼んで、前から問題提起を続けてきたと述べている。この石橋が編集した書物に『原発を終わらせる』(岩波新書、800円+税)がある。全部で14人の専門学者が、原発の問題性をそれぞれ多角的に考察したものだ。その最後に、本会の会員でもある原子力資料センターの共同代表、山口幸夫が、「原発のない新しい時代に踏みだそう」と書いているが、まさにその指摘の通りだ。ただ、残念なのは、全員が専門的な学者のせいか、正確に論述するためだろう、注や括弧内の説明などを入れすぎ、かなりわかりにくい文が少なくない。もっと素人にわかりやすい表現だったら、と



◆ 『磁力と重力の発見』の著者、山本義隆が思う。

福島の原発事故をめぐって

いくつかが学び考えたこと

山本義隆

一刻も早く原発依存社会から脱却すべきである——原発ファシズムの全貌を追い、容認は子孫への犯罪であると説いた『磁力と重力の発見』の著者、書き下ろし。

みすず書房 定価(本体1000円+税)

最近出したものが『福島の原発事故をめぐって』(みすず書房、1000円+税)だ。これは「磁力と重力」とは違い、素人もよく分かるような表現だ。冒頭、日本の「原発開発の真相底流」で、岸信介や中曽根康弘の動きなどを読んでいて、まったくそうだ、そうだと口に出してまいりそう、50年代以降の日本の政治・経済の動きが説得力をもつ論述となっている。

◆ 後半「科学技術幻想とその破綻」では、「一六世紀文化革命」2巻(みすず書房)の著書だけに、山本は原子力は「かつてジュール・ヴェルヌが言った『人間に許された限界』を超えていると判断しなければならぬ」と断言し、「原発ファシズム」という言葉まで使いつつ「根本的に新しい社会のあり方を見出すべき時がすでに来ている」と指摘する。脱原発以外に道がないという山口幸夫と同じである。お勧めできる。

◆ 1980年、市民の意見30の会の出発の際に、「日本を変える30の提言」を発表したが、

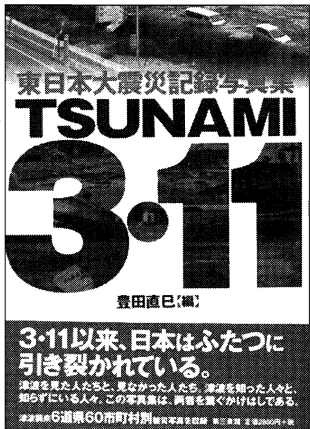
その第1項は「この社会を『核』のない社会にしよう。そのための手だてをつくそう。核兵器も原発も、核燃料再処理工場もいらない。再処理工場の建設はやめよ。非核3原則の厳守」だった。そして26項目には「憲法第9条の実現をめざせ。まず日米安保条約を辞め、米軍基地を撤去し、軍事予算を削減し、自衛隊をなくせ」とあった。だが、この原発と安保体制との関連を指摘した論述はこれまでにほとんどなかった。本来、日本の構造の本質には、その二つが深く組み込まれているのだ。

◆そこを鋭く追究した初めてといえる論文が近く出る。10月中旬に社会評論社から出版される武藤一羊の「潜在的核保有と戦後国家——フクシマ地点からの総括」に含まれる、最新の書き下ろし論だ。安保と原発の関連を指摘した武藤は、反核活動家の森滝市郎や今堀誠二たちの論を具体的に分析して、戦後の反核運動の経過をのべながら、山本義隆が辿った戦後の日本政治の中で「原子力」「平和利用」問題の経過を詳細に論ずる。

◆そして、最後に武藤は、「新しい見通しは、非核化・非軍事化のそれである。アジア地域をめぐる関係全体を非軍事化する、それへ向けての下からの——民衆レベルの——非戦・非暴力の連帯を基礎にして、日米関係の非軍事化——そのカナメは沖縄からの米軍基地の完全撤去——と東北アジアの非核化と多角的平和保障関係の形成にむかう見通

しである。それを実現するためには、日本が米中の覇権戦略のどちらにも加担しない立場を明確にし、領土問題をふくむ懸案を武力による威嚇によらずに解決する新しい方式を見出すことが必要である。／3・11の出口は、戦後日本の二重の核依存と脱核の手を切り、脱原発・脱覇権・非軍事化に向けて一歩をふみだすことにある」と結論する。重要な内容で、必読書の一つだろう。

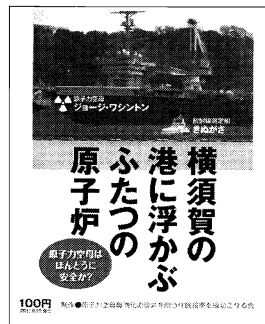
◆東日本大震災の写真集もかなりの数で発行されている。例えばこの2点の写真集も、すさまじい映像には声を呑む。その大部分の写



真は津波の被害のものだが、一部には福島県双葉町や大熊町などでの原発関連のものも含まれている。豊田直巳編『東日本大震災記録写真集』

『TSUNAMI 3・11』(第三書館、2800円+税) および第三書館編集部編の同書名『PART2』(同定価)である。

◆最後の一点は、書物とはいえないパンフレットだ。「横須賀の原子力空母母港化の是非を問う住民投票を成功させる会」制作の『横須賀の港に浮かぶふたつの原子炉』である。B5変形16ページで定価100円である。薄いパンフレットは、横須賀軍港に配備されている原子力空



母「ジョージ・ワシントン」にある二つの原子炉がいかに危険かを具体的に解説する。同艦にある2基ある熱出力60万kWの原子炉は、福島原発の兄弟だと指摘し、巨大地震と津波はいかなる危険を引き起こすかをのべるとともに、すでに艦船修理時に放射能事故が多くあったとも明らかにする。ぜひご覧いただきたい。(連絡先＝〒238-0002 横須賀市大滝町1-26清水ビル3階 横須賀市民法律事務所 所方『横須賀の港に浮かぶふたつの原子炉』発行者 電話) 046-82712713、FAX) 046-82712731 (よしかわ ゆういち、本誌編集委員)